

群馬県高崎市

中泉源十内遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

高崎市教育委員会
株式会社阿久津都市開発
山下工業株式会社

群馬県高崎市

中泉源十内遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

高崎市教育委員会
株式会社阿久津都市開発
山下工業株式会社

例　言

1. 本書は、株式会社阿久津都市開発（代表取締役 阿久津 異）による宅地造成に伴う中泉源十内遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は高崎市教育委員会による指導のもと、工事主体者である株式会社阿久津都市開発が土地所有者（複数名）の代表として山下工業株式会社（代表取締役 山下 尚）に委託し、その費用については土地所有者が全額負担した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地	群馬県高崎市中泉町字源十内 271、272、273、274-1、274-3、274-4、278、279	
高崎市遺跡調査番号	756	調査面積 455m ²
期間【現地調査】	平成31年2月22日～平成31年4月3日	
【整理作業】	平成31年4月4日～令和2年3月31日	
調査担当者	青木利文（山下工業株式会社 文化財事業部）	
調査監督員	高崎市教育委員会文化財保護課 埋蔵文化財担当	
4. 整理作業及び本書作成は、青木を中心に石塚 久則・川邊 みずき・城 ゆかり・谷藤 龍太郎・福島 緑子（山下工業株式会社）が行なった。		
5. 遺構図作成は、田中 隆明（タナカ設計）が行なった。		
6. 写真は、遺構を青木が、遺物を城が撮影し、航空写真撮影は新井一（まりも工房）が行なった。		
7. 本書の執筆については、第1章1を高崎市教育委員会文化財保護課が、第Ⅲ章6～9を城、それ以外を青木が行なった。		
8. 本書の挿図・図版作成は、青木・石塚を中心に川邊・城・谷藤・福島が行なった。		
9. 出土人骨については、宮崎 重雄氏に所見を頂いた。		
10. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して高崎市教育委員会が保管している。		
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、高崎市教育委員会文化財保護課の指導を得たほか、下記の諸氏から助言・協力を賜った。（五十音順・敬称略）		

大西 雅広 神谷 佳明 高橋 敦 谷藤 保彦 山崎 芳春

凡　例

1. 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標IX系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果2011である。
3. 本報告書で用いる遺跡地図・遺構図・遺物実測図・遺物写真等の縮尺は、すべてにスケールを表示した。
4. 本書掲載の第1図は1/2,500、第2図は1/10,000の高崎市発行の「高崎市都市計画基本図」を用い、一部改変引用した。
5. 計測表及び観察表中の（ ）内の数値は残存値、〈 〉内の数値は推定値を表す。
6. 土器の色調觀察は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修2011）を用いた。
7. 遺構図・遺物図の網掛けについては、凡例を右に明示した。■ 炭範囲 ■ 灰範囲 ■ 焼土 ■ 石

目 次

例言
凡例
目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	2
2. 調査の経過	
第Ⅱ章 遺跡を取り巻く環境	2
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	4
1. 調査区概観	4
2. 壁穴建物	4
3. 壁穴状遺構	4
4. 樹立柱建物	7
5. 樹列	7
6. 溝	7
7. 上坑	7
8. 井戸	7
9. ピット	7
第Ⅳ章 考察・検討	24
1. 3号壁穴建物出土の人骨について	24
2. 総括	

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図 開発区と中京殿内道路 位置図	1
第 2 図 中京殿内道路 周辺道路	3
第 3 図 中京殿内道路 全体図	4
第 4 図 中京殿内道路 基本順序と全体図	5
第 5 図 1号壁穴建物	7
第 6 図 1号壁穴建物出土遺物	8
第 7 図 2号壁穴建物	8
第 8 図 2号壁穴建物カマド及び出土遺物	9
第 9 図 3号壁穴建物	10
第 10 図 3号壁穴建物出土遺物	11
第 11 図 整理遺構	12
第 12 図 1号樹立柱建物及び出土遺物	13
第 13 図 2号樹立柱建物	14
第 14 図 3号樹立柱建物	14
第 15 図 1号櫛列	15
第 16 図 1・2号櫛列及び出土遺物	16
第 17 図 3号溝	16
第 18 図 4・5号溝	17
第 19 図 2・5・6号土坑	17
第 20 図 7~11号土坑	18
第 21 図 12~14・17号土坑	19
第 22 図 1号井戸及び出土遺物	20
第 23 図 1号井戸出土遺物	21
第 24 図 2号井戸	22
第 25 図 ピット出土遺物	23
第 26 図 3号壁穴建物 塩化物・骨片分布状況	24
第 27 図 遺構傾向	25

挿表目次

第 1 表 1号壁穴建物ピット計測表	8
第 2 表 1号壁穴建物出土遺物観察表	8
第 3 表 2号壁穴建物ピット計測表	9
第 4 表 2号壁穴建物出土遺物観察表	9
第 5 表 3号壁穴建物ピット計測表	10
第 6 表 3号壁穴建物出土遺物観察表	11
第 7 表 1号樹立柱建物ピット計測表	13
第 8 表 1号樹立柱建物出土遺物観察表	13
第 9 表 2号樹立柱建物ピット計測表	14
第 10 表 3号樹立柱建物ピット計測表	14
第 11 表 1号櫛列ピット・覆土計測表	15
第 12 表 2号溝出土遺物観察表	16
第 13 表 1号井戸出土遺物観察表	22
第 14 表 ピット出土遺物	23
第 15 表 ピット出土遺物観察表	23

写真図版目次

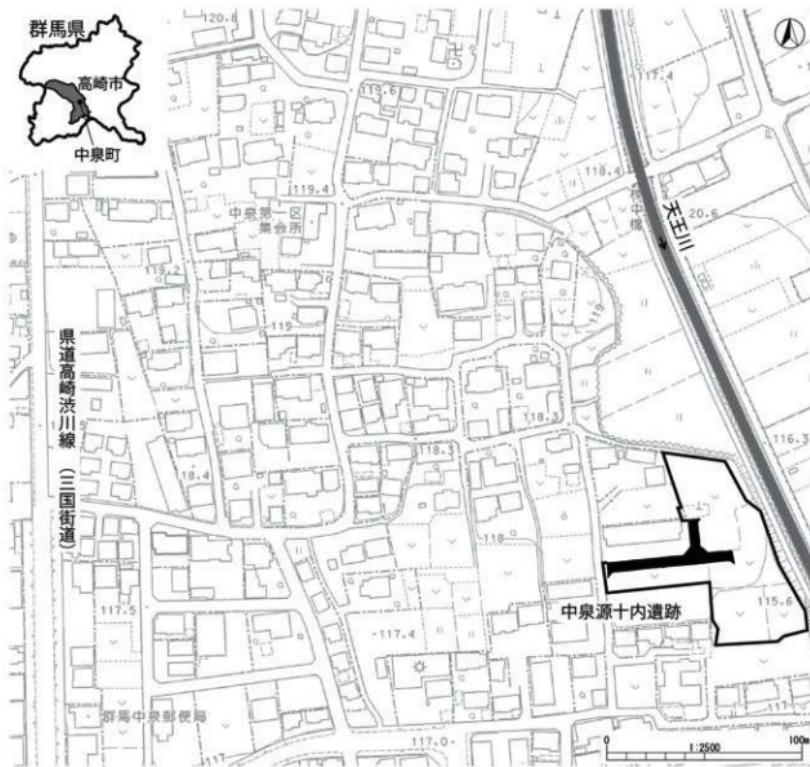
図版 1 調査区全貌 南東から	
2 調査区全貌	
図版 2 1. 天王川の上流から見る調査区遺構 2. 2号井戸竪基土壇 西から 3. 1~3号壁穴建物配置状況 4. 1号壁穴建物完掘 西から 5. 1号壁穴建物カマド 西から 6. 1号壁穴建物カマド煙道残存状況 7. 1号壁穴建物遺物出土状況 北西から	
図版 3 1. 2号壁穴建物ピット群完掘 西から 2. 2号壁穴建物カマド完掘 西から 3. 2号壁穴建物カマド掘方 補石出土状況 西から 4. 3号壁穴建物完掘 西から 5. 3号壁穴建物遺物・炭確認状況 西から 6. 3号壁穴建物遺物・炭確認状況 カマド廻辺	
7. 1号壁穴状遺構完掘 南から 8. 2号壁穴状遺構完掘 南から	
図版 4 1. 3号櫛列横構完掘 南から 2. 1号樹立柱建物完掘 西から 3. 2号樹立柱建物完掘 南から 4. 3号樹立柱建物完掘 南から 5. 1号・2号溝完掘 南から 6. 3号溝完掘 西から 7. 4号・5号溝完掘 南から 8. 1号櫛列 南東から	
図版 5 1. 1号井戸完掘 南から 2. 1号井戸セクション A 南から 3. 1号井戸出土状況 南から 4. 2号井戸上端 西から 5. 2号井戸セクション 西から 6. 2号土坑完掘 南から 7. 5号土坑完掘 北から 8. 6号土坑完掘 南から	
図版 6 1. 8号土坑完掘 南東から 2. 9号土坑完掘 南東から 3. 11号土坑完掘 西から 4. 12号土坑・P59 完掘 西から 5. 14号土坑完掘 南から 6. 15号土坑完掘 東から 7. 調査区西側 南東より 8. 調査区中央 南西より	
図版 7 出土遺物(1)	
図版 8 出土遺物(2)	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

平成 30 年 11 月、工事主体者である株式会社阿久津都市開発から、高崎市中泉町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中泉遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年 11 月 26 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年 12 月 19 日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、平安時代の堅穴建物跡と土坑を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「中泉源十内遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事業取扱要項」に準じ、平成 31 年 2 月 4 日に株式会社阿久津都市開発と民間調査機関 山下工業株式会社・市教委での三者協定を締結、平成 31 年 2 月 6 日に工事主体者 株式会社阿久津都市開発と民間調査機関 山下工業株式会社との間で契約を締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第 1 図 開発区と中泉源十内遺跡 位置図

2. 調査の経過

本遺跡の調査区は部分的に集合住宅の駐車場に該当している。このため、事前に駐車場の使用者に対し調査の周知を行なった。また表土掘削の前には駐車場のアスファルトと路盤を撤去し、調査区に面してバリケードを設置した。遺構確認面までの掘削深度は高崎市教育委員会文化財保護課による試掘調査の情報どおり(80cm)であった。排土は調査区の隣接地に置き、飛散防止のため集積し、シートを覆い保護した。遺跡の位置は世界測地系座標値、X=41,810、Y=-74,425 を起点とし、5m のグリッドを設定した。このグリッドは東に向かって A～N、南に向かって 1～7 とした。

表土掘削と遺構確認は 2 月 25 日から行ない、遺構確認面まではバックホーで掘削した。人力による遺構掘削は 3 月 5 日から行なった。遺構の記録は、断面はメジャーを用いた手実測で行ない、平面はトータルステーションを用いて計測した。記録写真は遺構覆土堆積状況、遺物出土状況、遺構の全景などをモノクロフィルム、リバーサルフィルム、およびデジタルカメラによる撮影を行なっている。

3 月 20 日には遺構掘削および記録の大半が終了となり、ドローンによる航空写真撮影を実施した。その後に竪穴建物の掘方確認と井戸の断割り掘削、確認面以下の遺構確認を行なって 3 月 29 日に高崎市教育委員会文化財保護課による完了立合を行ない、埋め戻し復旧を開始した。4 月 3 日に資器材を搬出し、すべての作業が終了した。

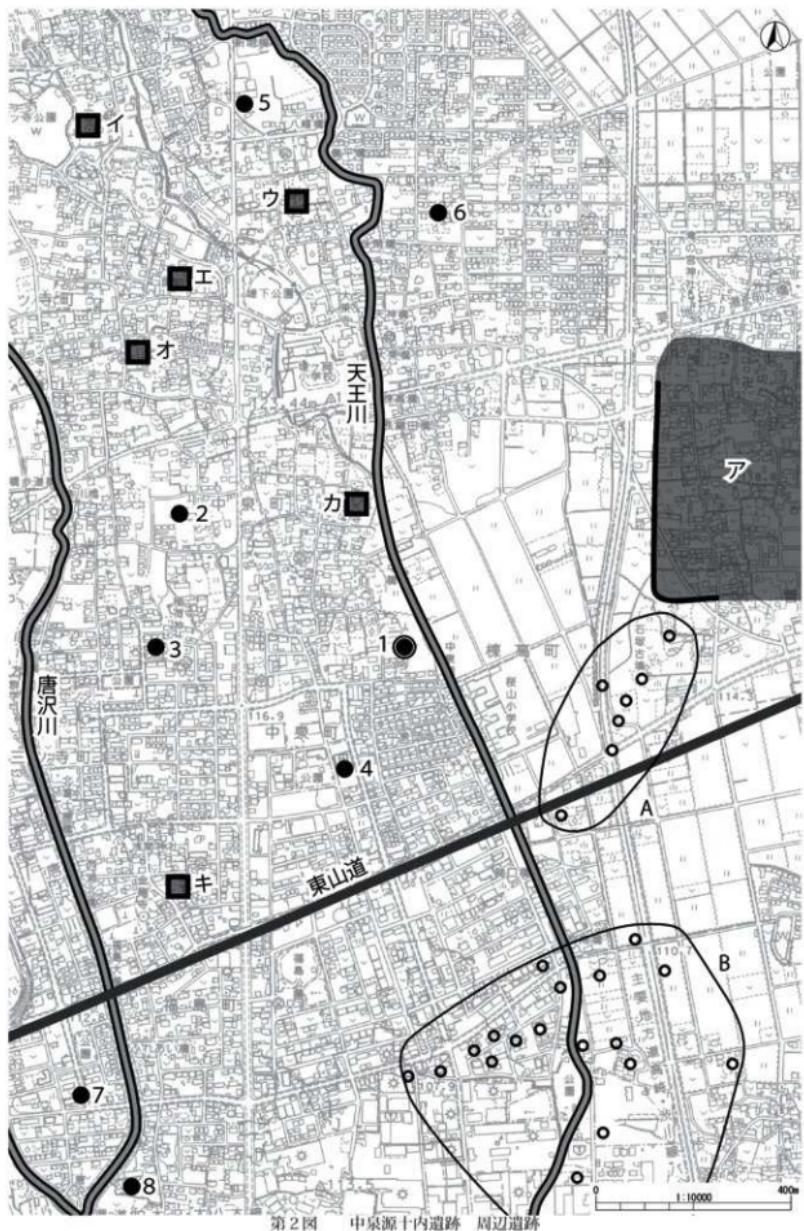
第Ⅱ章 遺跡を取り巻く環境

中泉源十内遺跡は棟名山南麓は相馬ヶ原扇状地の西端に位置し、周辺の河川は南へ流下する井野川の支川となる天王川と唐沢川に挟まれた南北に細長い微高地に立地する。

現在の街並みは台地中央を南北に走る三国街道沿いに形成されたものである。特に 1970 年代からは周辺の耕作地に住宅、店舗、工業団地等が形成されているが、これらの開発に伴う発掘調査の成果は小規模で断片的な情報に過ぎず、地域史を語るには十分とはいえない。台地中央部の遺跡、中泉源十内遺跡(1)は古代から中世の集落、中泉十王堂遺跡(2)は古墳時代前期・後期の集落、中泉稻荷前遺跡(3)は古代の集落、中泉遺跡(4)からは古代の水田跡が出土している。台地北端部の棟高南八幡街道遺跡(5)では古墳・奈良・平安時代の集落、棟高村北遺跡(6)では繩文・奈良・平安時代の遺跡が調査されている。台地南端部の西浦遺跡(7)では弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の集落、福島富士腰南遺跡(8)では弥生時代後期・平安時代の集落が調査されている。また台地の南東には古墳群がある。菅谷古墳群(A)は 7 基の残存が確認されている。中核の古墳は石塚薬師塚古墳と呼ばれる。小八木古墳群(B)は 20 基もの残存が確認されている。中核の古墳は三本山古墳と呼ばれ、主体部は横穴式石室で銅鏡の出土が記録されている。二つの古墳群はともに古墳時代後期から終末期の築造である。本遺跡の南には台地を東西方向に横断する東山道の存在が推定されており、これは野尻駅家から群馬駅家に向かうルートと考えられる。中世では本遺跡の東に菅谷城跡(ア)があるほか、微高地上には神社仏閣などとして石上寺館跡(イ)、棟高館跡(ウ)、諏訪社館跡(エ)、天昌寺館跡(オ)、中泉館跡(カ)、中泉内出の砦跡(キ)などが想定されている。これらは発掘調査が行なわれていないため不明な部分も多いが、石造物などが存在し中世の痕跡が残る。

周辺遺跡

- 1：中泉源十内遺跡 2：中泉十王堂遺跡 3：中泉稻荷前遺跡 4：中泉遺跡 5：棟高南八幡街道遺跡 6：棟高村北遺跡
7：西浦遺跡 8：福島富士腰南遺跡 A：菅谷古墳群 B：小八木古墳群 ア：菅谷城跡 イ：石上寺館跡 ウ：棟高館跡
エ：諏訪社館跡 オ：天昌寺館跡 カ：中泉館跡 キ：中泉内出の砦跡



第2図

中泉源十内遺跡 周辺遺跡

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

1. 調査区概観

調査の概観

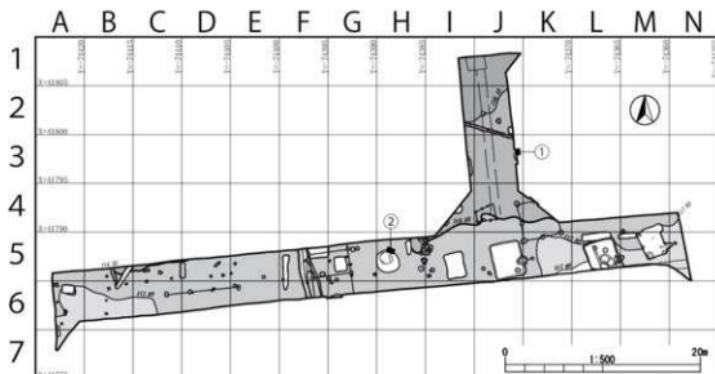
調査区は分譲地内の道路部にあたり、「逆T」字状で東西に65m、北に18m張り出しを持つ。調査区の西部はピットと土坑が確認されたが遺構数としては希薄であった。一方、東部は竪穴建物や竪穴状遺構、掘立柱建物、井戸など、多くの遺構が確認されている。確認された遺構は竪穴建物3軒、竪穴状遺構が3基、掘立柱建物3棟、柵列1基、溝5条、井戸2基、土坑13基、ピット62基である。

竪穴建物は3軒ともに調査区の東部にあり、時期は異なるが東にカマドを持ち重複なく配置する。竪穴状遺構は調査区中央に集中し、方形の平面形状で規則的な軸方向を持っており、覆土にはAs-Bを含んでいることから、中世以降の所産とみられる。掘立柱建物は覆土にAs-Bを含むものと、含まないものがあり、奈良・平安時代以前と中世以降のものに分けることができる。溝は3号溝と5号溝がHr-FA層(IV層)およびAs-C混土(V層)に覆われているため古墳時代に該当し、それ以外は奈良・平安時代から中世の遺構である。井戸は2基ともに覆土上層にAs-Bを含んでいる。特に1号井戸からはカワラケや軟質陶器、石臼類などの中世遺物が出土した。

本遺跡で検出された遺構の層位や覆土、出土遺物により古墳時代から中世にかけての遺跡と考えられる。

基本土層

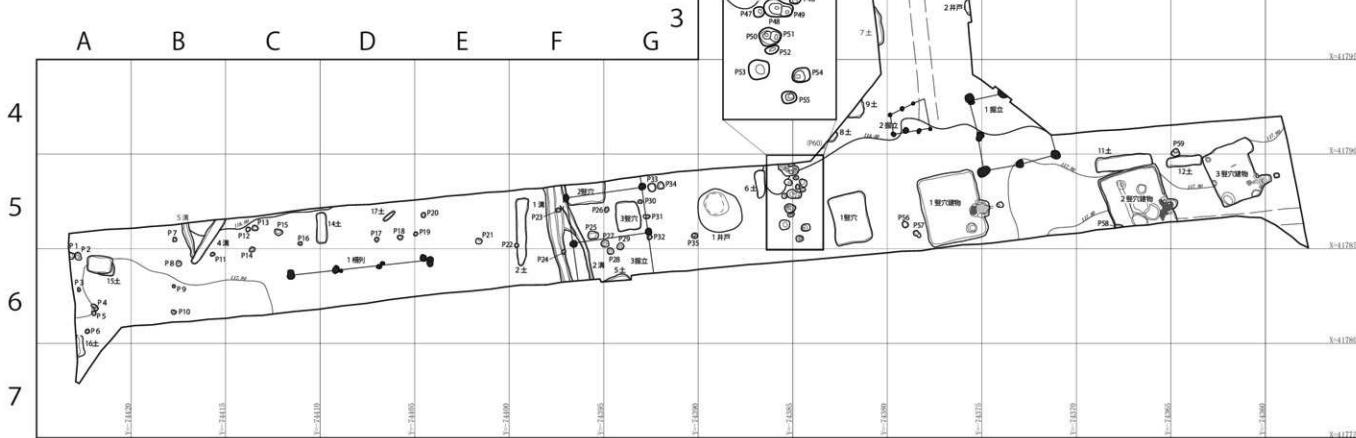
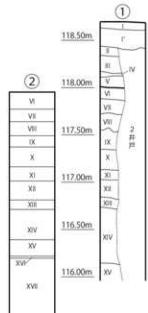
基本土層は地表面を深く掘削した2号井戸の断面①と1号井戸壁面②で観察を行なった。現地表から30cm前後までは現代の耕作土層である。また、約55cmにはHr-FA層(IV層)、60cmにはAs-Cを多く含む黒褐色土層(V層)となる。遺構確認面はV層の下層にある黒褐色土層(VI層)の上面で確認した。よって本調査区では大半の遺構(古墳時代後期以降)が、本来確認される面より下位での確認となる。なお、IV層とV層については調査区内に部分的に残存するため、VI層を確認面とした。確認面以下は全体的にややシルト質の粘質土であり、1号井戸の下層部は砂質の堆積層となる。調査区の地形は東西方向が標高118.00mから117.90m程度のほぼ平坦な地形である。一方、南北方向は北から南に緩やかに傾斜した地形となる。



第3図 中泉源十内遺跡 全体図

基本層序

- I 黒褐色土、しまり弱い、粘性あり、規則作土。
- II 黒褐色土、しまり弱い、粘性あり、凹斜作土。
- III 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-C が混じる。
- IV 明黄褐色土、しまりあり、粘性あり、Hr-FA(～3mm)を微量含む。
- V 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-C(1～5mm)を多量に含む。
- VI 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Cが高密度に残る。部分的に確認される。
- VII 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Cを微量含む。崩上位が確認確認。
- VIII 黒褐色土、しまりあり、粘性あり。
- IX 黒褐色土、しまり強い、白色粉を微量含む。
- X 黑褐色土、しまり強い、粘性強い、白色粉を微量含む。
- XI 黑褐色土、しまり強い、粘性強い、黄色粉を微量含む。
- XII 褐色土、しまり強い、粘性強い、やや砂質。黄色粉を多量に含む。
- XIII 黑褐色土、しまり強い、粘性強い、白色粉を微量含む。
- XIV 黄褐色土、しまり強い、粘性強い、シルト質、鉄分沈着。
- XV ぶぶく黄褐色土、しまり強い、粘性あり、やや砂質。
- XVI ぶぶく黄褐色土、しまり強い、粘性あり、やや砂質。
- XVII 灰黄褐色土、しまり強い、粘性あり、砂質、ラミナリに堆積。灰白色粘土が混じる。



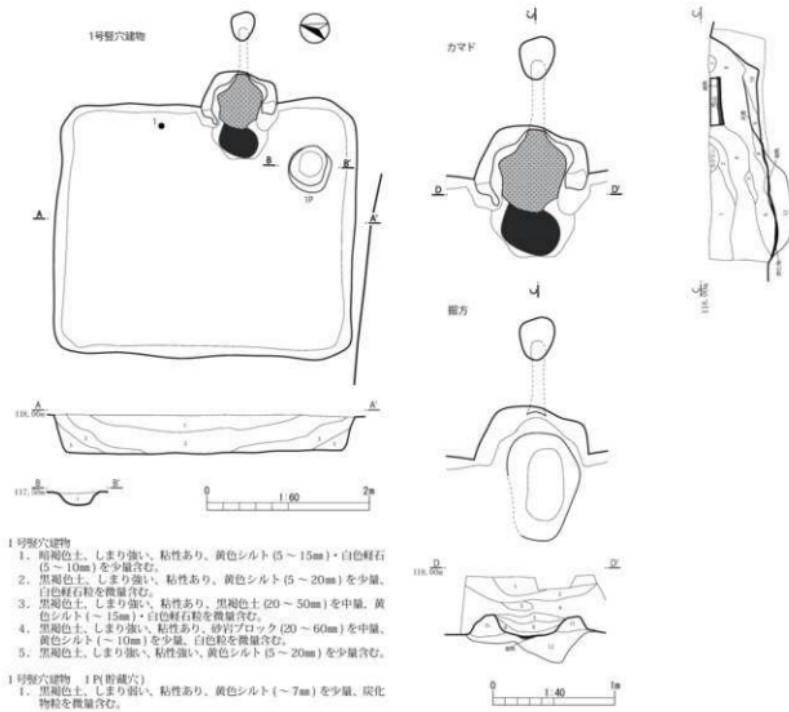
第4図 中泉源内跡地 基本層序と全体図

2. 竪穴建物

竪穴建物は3軒検出された。これらは調査区の東部に分布し、カマドはいずれも東に配置されている。

1号竪穴建物

位置 調査区東 J-5 3軒中で最も西にある。**状況** 遺構の全体が検出され、重複する遺構はない。**形態・規模** 基本形状は横長の長方形であり、長軸 369cm、短軸 311cm、深さ 48cm である。なお確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものと推定される。壁は垂直に立ち上がる。**方位** N-76°E。**床面** やや明るい粘質土(Ⅳ層)を床面とし、全面的に平坦である。掘方は認められない。**ピット** 検出されない。**カマド** 東壁のやや南に造られる。焚口部から燃焼部には炭層や灰層の広がりがある。袖は長さ 20 ~ 25cm 程度でⅥ層に近い粘質土で造られる。煙道は良好に残り、地山を掘りぬいたトンネル状の構造である。掘方は焚口部から燃焼部にかけて土坑状の掘り込みが確認できた。**貯蔵穴** カマド手前の南に掘られた 1P が該当し、ほぼ円形を呈する。長軸 58cm、短軸 53cm、深さ 18cm を測る。**壁周溝** 検出されない。**遺物** 床面付近からの石製の紡錘車(1)と覆土中からの貝巣穴泥岩とみられる小蝶(2)が出土した。なお、土師器、須恵器は極小片であった。**時期** 時期の決め手となる出土遺物がほとんどないが、カマドの形状などから奈良・平安時代の所産と考えられる。



第5図 1号竪穴建物

1号堅穴建物 カマド

1. 黒褐色土、しまり強い、粘性あり、黄色シルト(5~20mm)を少量、白色軽石粒を微量含む。
2. 黒褐色土、しまり強い、粘性あり、白色土・炭化物粒を少量含む。
3. 褐色土、しまりあり、粘性強い、カマド構築材の一部。
4. 黑褐色土、しまり強い、粘性あり、カマド構築材粘土(~40mm)と黄色シルト(~10mm)を少量、白色軽石粒を微量含む。
5. 褐色土、しまりあり、粘性強い、カマド構築材の一部。
6. 黑褐色土、しまりあり、粘性あり、白色土を少量、灰土粒を微量含む。
7. 黑褐色土、しまりあり、粘性あり、焼土粒を多量に混入。黄色シルト(~10mm)を少量含む。
8. 黑褐色土、しまりあり、粘性強い、焼土土体。ブロック状(5~20mm)で粒の間隔が広い。黑色土が多量に混じる。
9. 黑褐色土、しまり弱い、粘性あり、焼土粒・炭化物粒・灰を微量含む。
10. 明褐色土、しまり弱い、粘性あり、焼土粒を微量含む。堆積はブロック状で隙間が多い。
11. 明褐色土、しまり弱い、粘性弱い、カマド構築材。黄色シルト(~10mm)を少量含む。
12. 暗褐色土、しまり弱い、粘性弱い、XII層に類似し灰白色の砂岩粒(~10mm)を微量含む。

第1表

1号堅穴建物ピット計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1P	58	53	18

第2表 1号堅穴建物出土遺物観察表

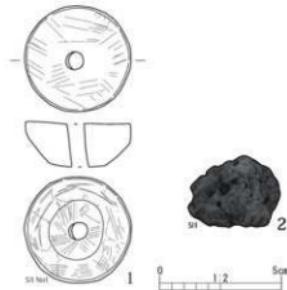
遺構No.	出土位置	種別	長さ・幅・厚さ(cm)・重量(g)	石材	形態・特徴	備考
1	床面 石器部 付近	石器部 結縛串	4.3~4.3・1.8・54.74	蛇紋岩か?	厚台形、黒灰色、全面研磨され、擦痕あり。斜面と側面に部分的な光沢があり、特に側面は横方向の刻線が目立つ。	
2	覆土 隕		3.6~--・2.4・14.05	貝塚穴泥岩か?	3~4mmの凹みがみられる。	貝塚闇遺物

2号堅穴建物

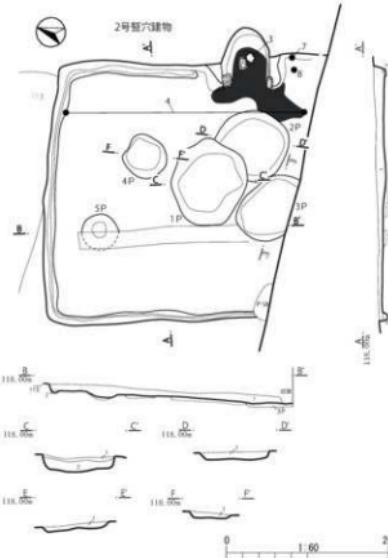
位置 調査区東 L-5 北に11号土坑、西に58号ピットが重複。**状況** 遺構の南部は調査区外となる。また、11号土坑と58号ピットにそれぞれ切られている。**形状・規模** 基本形状は横長の長方形であり、長軸は残存値で340cm以上となり、短軸323cm、深さ10cmである。なお確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものと推定される。**方位** N-71°-E。

床面 VI層を床面とする。全面的にやや起伏があり、北から南にやや傾斜する。掘方は認められない。ピット1~5Pを確認した。カマドの前面部にある1~3Pは覆土に焼土や炭化物を含んでおり、カマドからの灰や焼土を充填したものとみられる。カマド 東壁の南寄りに造られる。焚口部付近と燃焼部には炭層が広がる。袖は長さ30~35cm程度でVI層に近い粘質土で造られ、先端に砂岩質礫を構築材として据え付けている。また、カマド中央は袖と同様の砂岩質礫があり、支脚とした可能性がある。掘方は焚口部から燃焼部にかけてやや浅い掘り込みがある。貯蔵穴 検出されない。壁周溝 カマド周辺部以外はほぼ全体を巡る。遺物 床面およびカマド、ピットから出土している。6点を掲載した。3~7は土師器の环、8は須恵器の环。

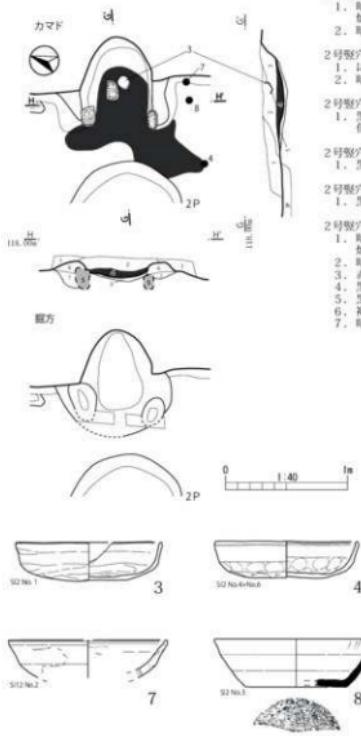
時期 出土遺物から8世紀後半から9世紀初め頃と考えられる。



第6図 1号堅穴建物出土遺物



第7図 2号堅穴建物



第8図 2号竪穴建物カマド及び出土遺物

第4表 2号竪穴建物出土遺物観察表

採取 箇所	出土 位置	器種	部位 既存率	口径・底径・器高	色調	胎土	焼成	調整	備考
3	カマド	土師器 环	ほぼ完形	11.9・...・3.2	にふい褐色	精選	酸化	内面頸部ナデ・底部へラ削り 内面頸部ナデ	
4	床直	土師器 环	L縫～底部 1/2	11.5・...・3.0	褐色	精選	酸化	内面頸部ナデ・底部へラ削り 内面頸部ナデ・指オサエ	
5	IP	土師器 环	L縫～底部 1/4	〈11.2〉・...・2.4	褐色	精選	酸化	内面頸部ナデ・指オサエ・ヘラ削り後ナデ 内面頸部ナデ・指オサエ	
6	IP	土師器 环	L縫～底部 1/8	〈11.8〉・...・(3.0)	褐色	精選	酸化	内面頸部ナデ・ヘラ削り 内面頸部ナデ	
7	床直	土師器 环	L縫～剥離 1/8	〈12.8〉・...・(3.1)	にふい褐色	精選	酸化	内面頸部ナデ 内面頸部ナデ	縮減している
8	床直	土師器 环	L縫～底部 1/3	〈13.2〉・(8.1)・4.0	灰白色	精選	酸化	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	上縁部外側に 一次焼成時想斑

3号竪穴建物

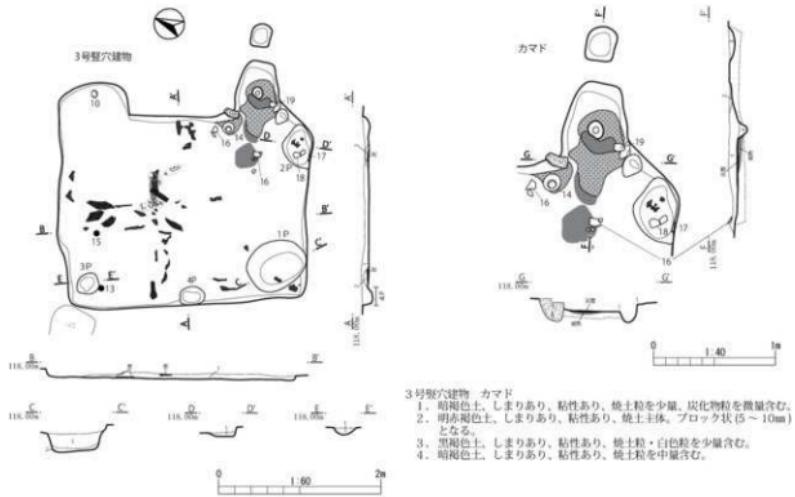
位置 調査区東 M-4.5 3軒中で最も東にある。**状況** 遺構の全体が検出され、重複する遺構はない。北東隅に張り出し部があり、当初は13号土坑として調査を行なったが、覆土の違いがなく、床面の標高も変化がないことから、張り出しを持つ竪穴建物とした。覆土中からは炭化木材が面的に広がるとともに、焼かれた人骨も確認された。この点については焼失した建物や火葬の痕跡の可能性がある。**形状・規模** 基本形状は横長の長方形

- 2号竪穴建物
1. 暗褐色土、しまり強い、粘性あり、白色粗石(5~10mm)を少量。黄色シルト粒・炭化物粒・燒土粒を微量含む。
 2. 暗褐色土、しまりあり、粘性あり、燒土粒・炭化物粒を微量含む。
- 2号竪穴建物 IP
1. にふい黃褐色土、しまりあり、粘性あり、燒土(3~10mm)を多量。炭化物粒を微量含む。
 2. 暗褐色土、しまりあり、粘性あり、燒土粒・炭化物粒を少量含む。
- 2号竪穴建物 2P
1. 黑褐色土、しまりあり、粘性あり。灰白色粘土(5~30mm)を中量。燒土(5~10mm)・炭化物粒を少量含む。
 2. 黑褐色土、しまりあり、粘性あり。灰白色粘土(5~7mm)を少量。燒土粒を微量含む。
- 2号竪穴建物 4P
1. 黑褐色土、しまりあり、粘性あり。灰白色粘土(5~7mm)を少量。燒土粒を微量含む。
- 2号竪穴建物 カマド
1. 暗褐色土、しまり強い、粘性あり。白色粗石(5~10mm)を少量。黄色シルト粒・炭化物粒・燒土粒を微量含む。
 2. 暗褐色土、しまり強い、粘性あり、燒土上(~7mm)、白色粗石を中量含む。
 3. 赤褐色土、しまり弱い、粘性あり、燒土土塊・ブロック状(5~20mm)で粒間の隙間が多い。
 4. 黑褐色土、しまり強い、粘性あり、灰白色粘土・燒土(10~30mm)を中量含む。
 5. 黑褐色土、しまり強い、粘性あり、灰褐色土・燒土(5~20mm)を多量に含む。
 6. 細褐色土、しまり強い、粘性あり。カマド灰。灰褐色粘土を中量。燒土粒を少量含む。
 7. 暗褐色土、しまりあり、粘性あり。燒土上(~7mm)を少量含む。

第3表
2号竪穴建物ピット計測表

通号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
1P	126	90	21
2P	89	86	12
3P	94	67	11
4P	54	52	7
5P	46	-	11

であり、長軸 306cm、短軸 234cm、深さ 14cm となる。また、北東隅に長さ 42cm、幅 87cm の張り出しを持つ竪穴建物となる。なお確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものと推定される。**方位** N-68°
E。
床面 VI 層を床面とする。全面的にやや起伏があるが、しまっている。掘方は認められない。**ピット** 2～4P はいずれも壁面付近にあり、建物を構成するものであるかは不明である。**カマド** 南東隅に作られ、袖は確認できず、竪穴建物の壁外に作られている。また、カマド本体から東には焼土を含むピット状の窪みがあり、本カマドの煙道の一部と判断した。カマド接点部の北側に 20cm 程度の礫を据え付けている。また、接点部の南側は礫の痕跡となる径 20cm 程度の窪みが残る。カマドの中央には径 15cm の支脚痕跡とみられる窪みがある。カマドの焚口から燃焼部は灰層および焼土が広がるほか、支脚痕の付近は被熱による赤化が著しい。**貯藏穴** 南西隅に掘られた 1P が該当し、梢円形を呈する。長軸 72cm、短軸 58cm、深さ 21cm を測る。壁周溝 検出されない。**遺物** 床面および覆土中から出土し、一部は表土掘削の段階で確認された。13 点を掲載した。9～14 は酸化焰焼成の壺および塊、15 は灰釉陶器の塊、16～18 は土釜、19 は壺でいずれも酸化焰焼成である。20 は炭化しているが加工の痕跡がある木製品で、用途は不明である。21 は金属製品で、釘とみられ、側面に木質部が残る。**時期** 出土遺物から 10 世紀後半代と考えられる。



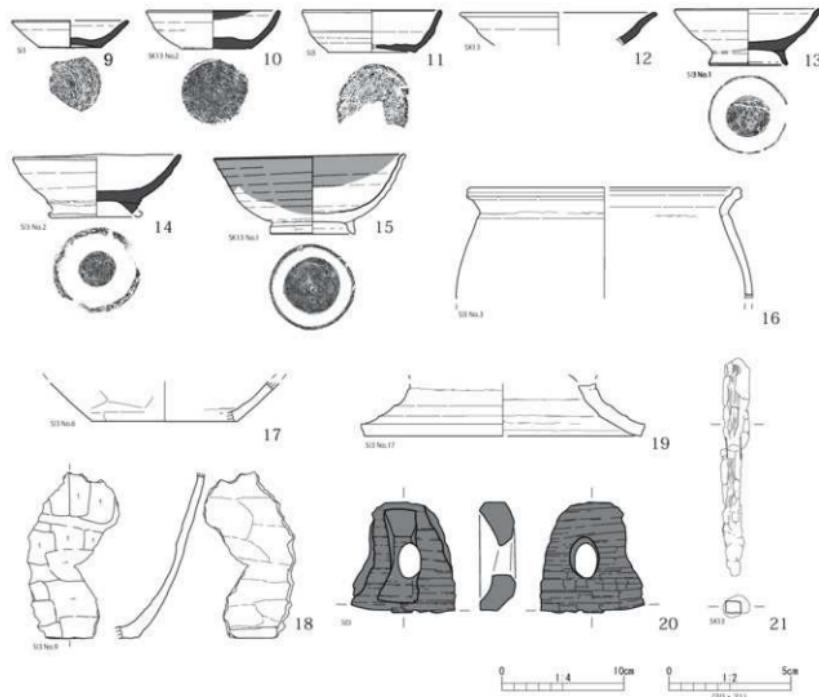
3号竖穴建物
 1. 前褐色土。しまりあり、粘性あり。炭化物 (5～20mm) を中量。白色粒・焼土粒を少量含む。
 2. 明赤褐色土。しまりあり、粘性弱い。被熱痕跡、やや砂質。
 3. 黑褐色土。しまりあり、粘性弱い。炭化木材。炭と灰が主。

- 3号竖穴建物 1P
 1. 黒褐色土。しまりあり、粘性あり。炭化物 (5～20mm) を少量。焼土粒・白色粒を微量含む。
 2. 黑褐色土。しまりあり、粘性強い。焼土粒・炭化物を微量含む。
- 3号竖穴建物 2P
 1. 黑褐色土。しまりあり、粘性あり。炭化物 (5～30mm) を中量。焼土粒を少量含む。
- 3号竖穴建物 3P
 1. 前褐色土。しまりあり、粘性弱い。焼土粒を微量含む。

第 5 表
 3号竖穴建物ピット計測表

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
1P	73	59	28
2P	56	36	12
3P	30	25	8
4P	30	22	5

第 9 図 3号竖穴建物



第10図 3号竪穴建物出土遺物

第6表 3号竪穴建物出土遺物観察表

各単位は口径(長さ)・底径(幅)・器高(厚さ)=cm

器種 部 位	出土 位置	器種	部位 残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	焼成	調整	備考
9 覆土	窓櫛 付	窓櫛器 付	上縁～底部 1/4	(9.4)・(5.2)・2.2	にぶい褐色	精選	焼成	外面部クロナデ・底部回転系切り 内面部クロナデ	
10 床直	窓櫛器 付	完形	10.7・5.2・3.2	褐色	良好	酸化 空氣味	焼成	外面部クロナデ・底部回転系切り 内面部クロナデ	黒斑あり
11 覆土	窓櫛器 付	上縁～底部 1/2	11.4・7.0・3.4	灰白色	精選	酸化	焼成	外面部クロナデ・底部回転系切り 内面部クロナデ	
12 覆土	窓櫛器 付	口縁部 1/8	(16.4)・—・(2.7)	黄褐色	良好	酸化	焼成	外面部クロナデ 内面部クロナデ	黒くすむ
13 床直	窓櫛器 高台付	上縁～底部 1/2	11.8・6.3・4.6	褐色	精選	酸化	焼成	外面部クロナデ・底部糸切り 内面部クロナデ	上縁部内側に 一次焼成時黒斑
14 床直	窓櫛器 高台付	ほぼ完形	13.5・—・(5.0)	淡褐色	砂粒含む	酸化	焼成	外面部クロナデ・底部糸切り・駆舟高台 内面部クロナデ	
15 床直	灰陶窓櫛 付	ほぼ完形	15.4・6.8・6.5	灰白色	良好	灰釉	焼成	外面部クロナデ 内面部クロナデ	施釉濁け掛け
16 覆土	土釜	上縁～胸部 1/4	(21.8)・—・(9.0)	褐色	良好 砂粒少量	酸化	焼成	外面部ナデ・ヘラナデ 内面部ナデ・ヘラナデ	附近外に同一品 あり
17 床直	土釜	脚下部 1/4	—・(12.0)・(3.3)	褐色	良好	酸化	焼成	外面部ヘラナデ 内面部ナデ	
18 2P	土釜	胴～底部	—・—・(13.7)	にぶい黃褐色	白色長石 砂粒含む	酸化	焼成	外面部万向ヘラ削り 内面部指ナデ	
19 カマド	壺	台部 1/8	—・(22.6)・(4.3)	淡褐色	白色長石 含む	酸化	焼成	外面部ナデ 内面部ナデ	

器種 No.	出土 位置	種別	残存率	長さ・幅・厚さ・重量(g)	形態・特徴	備考
20	覆土	木製品	破片	(4.2)・(4.6)・1.4・—	柾目の材を使った把手部分か?	全体炭化 コナラ属クサギ節
21	覆土	金属	ほぼ完形	9.0・1.1・0.9・10.06	表面は錆と一部銅質に覆われている。	

3. 竪穴状遺構

竪穴状遺構は3基検出された。これらは調査で土坑として扱ったが、方形のプランで、規則的な軸方向であることから、竪穴状遺構とした。これらの覆土にAs-Bを含んでいる。

1号竪穴状遺構（旧1号土坑）

位置 調査区中央部 I-5 **状況** 調査では1号土坑として扱ったが、竪穴状遺構に変更した。遺構の全体が検出され、重複する遺構はない。覆土にAs-Bを含んでいる。**形態・規模** おおよそ長方形。長軸268cm、短軸191cm、深さ33cmである。なお確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものとみられる。壁は垂直に立ち上がる。**方位** N-12°-W。**床面** やや明るめな粘質土（Ⅶ～Ⅷ層）を床面とし、平坦であるが、特に硬化する範囲はない。**ピット** 検出されない。**遺物** 極めて少なく、須恵器と灰釉陶器の微細片が出土しているが、本遺構に伴うものでなく、流れ込みによる混入の可能性がある。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

2号竪穴状遺構（旧3号土坑）

位置 調査区中央部 F-5 北は調査区外となる。3号掘立柱建物と重複し、壁断面では西の1号溝を切っている。**状況** 調査では3号土坑として扱ったが、竪穴状遺構に変更した。覆土には大きめの地山ブロックが混じるほか、As-Bを含んでいる。**形態・規模** 遺構は大部分が調査区外となるため全体の形は不明であるが方形基準と予想される。東西は213cm以上、南北は残存値で110cm、深さは確認面からは18cmである。ただし、壁面観察では遺構上部と地山層（Ⅱ層）の区別がはっきりしないものの、おおよそ75cm程度の深さとなる。**方位** N-85°-E。**床面** VI層を床面とし、平坦であるが、特に硬化する範囲はない。**ピット** 検出されない。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

3号竪穴状遺構（旧4号土坑）

位置 調査区中央部 G-5 3号掘立柱建物の範囲内に位置する。**状況** 調査では4号土坑として扱ったが、竪穴状遺構に変更した。遺構の全体が検出され、重複する遺構はない。覆土にAs-Bを含んでいる。**形態・規模** おおよそ長方形。長軸155cm、短軸130cm、深さは最大7cmである。なお1号竪穴状遺構と同様、本来はさらに深いものとみられる。**方位** N-6°-W。**床面** VI層を床面とし、部分的に凹凸があり、特に硬化する範囲はない。**ピット** 検出されない。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。



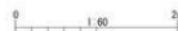
- 1号竪穴状遺構
1. 褐色土上。しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。
黄色シルト粒を微量含む。
2. 喀斯特地山(10～20mm)を中量、黄色シルト粒を微量含む。
3. 喀斯特地山。しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。
黄色シルト粒を微量含む。



- 2号竪穴状遺構
1. 褐色土。しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。
黄色シルト(～7mm)・白色軽石を微量含む。
2. 喀斯特地山。しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。
喀斯特地山(20～40mm)を多量に含む。
3. 黒褐色土。しまり強い、粘性あり、As-Bが混じる。



- 3号竪穴状遺構
1. 喀斯特地山。しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。
黄色シルト(5～15mm)・白色軽石(5～10mm)を少量含む。



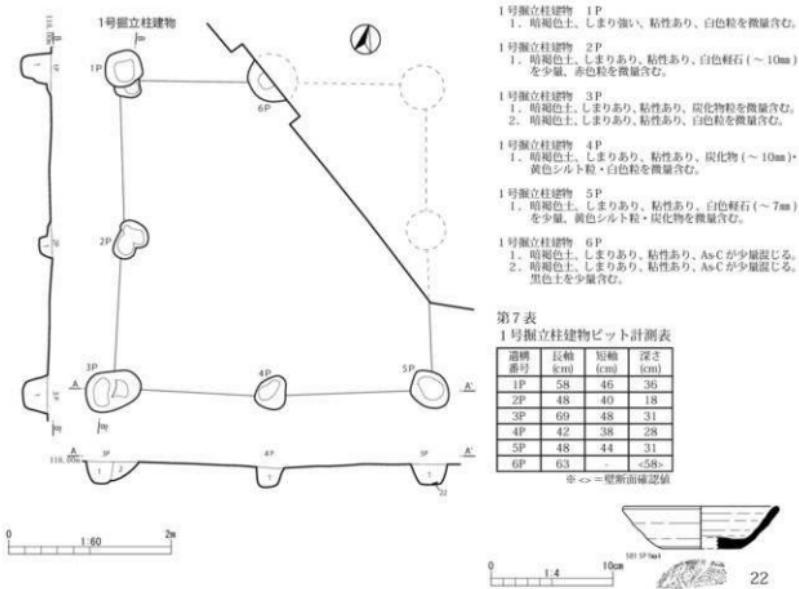
第11図 竪穴状遺構

4. 据立柱建物

据立柱建物は3棟検出された。このうち1号据立柱建物は覆土にAs-Bを含まない。一方2・3号据立柱建物はAs-Bを含んでおり、時期に違いがある。

1号据立柱建物

位置 調査区東 JK-4.5 南西には1号竪穴建物が隣接する。**状況** 2×2間の建物と想定されるが、北東部は調査区外となる。**形状・規模** 一辺が390cmのほぼ正方形で、柱間は180~190cm程度となる。**方位** N-13°-W。**ピット** 総数6基を検出。覆土は暗褐色土が中心で、As-Bは含まない。各ピットは切り合いを持つものがあり、建て替えの可能性が考えられる。深さは確認面(VI層)から30cm前後となるが、壁面での断面記録ができる6PはⅢ層から掘り込まれており、深さは58cmであった。このことから、その他のピットも本来はさらに深いものとみられる。**遺物** 5Pからは、須恵器の环(22)が出土した。**時期** 出土遺物に須恵器の环があったほか、覆土にAs-Bが混じっておらず、奈良・平安時代の所産と考えられる。



第12図 1号据立柱建物及び出土遺物

第8表 1号据立柱建物出土遺物観察表

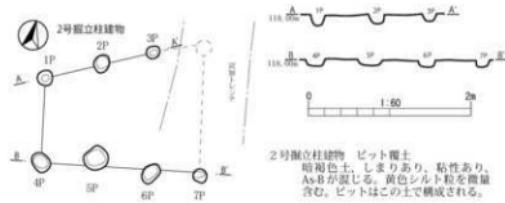
各単位は口径・底径・壁高=cm

掘藏 No.	出土 位置	器種	部位	底存率	口径・底径・器高	色調	胎土	焼成	調査		備考
									外面部	内面部	
22	5P 床底	須恵器 环	J-4.5	1/5	Φ(12.3) × (6.2) × 3.5	灰白色	良好	還元	外面部クロナナデ 内面部クロナナデ		坑窓切り離し 技法不明瞭

2号据立柱建物

位置 北の張り出し部の接続部 J-4 **状況** 周辺に重複する遺構ではなくピット群からなる。平行ではないが南北のピット列が向かい合っており、3×1間の小型の据立柱建物とした。なお遺構の配列から、北東隅にピット

の存在が推測されるが、試掘トレンチにより削られたものと想定した。形状・規模 不整形な方形となり、東西 200cm、南北 108 ~ 140cm、柱間は 70cm 程度となる。方位 N-77°-E。ピット 7 基を検出。覆土は暗褐色土で、As-B を含んでいる。各ピットの深さは 7 ~ 14cm であるが、確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものとみられる。遺物 出土していない。時期 覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。



第9表
2号掘立柱建物ピット計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1P	19	19	14
2P	23	19	10
3P	17	15	8
4P	25	20	8
5P	30	30	7
6P	26	19	7
7P	17	17	8

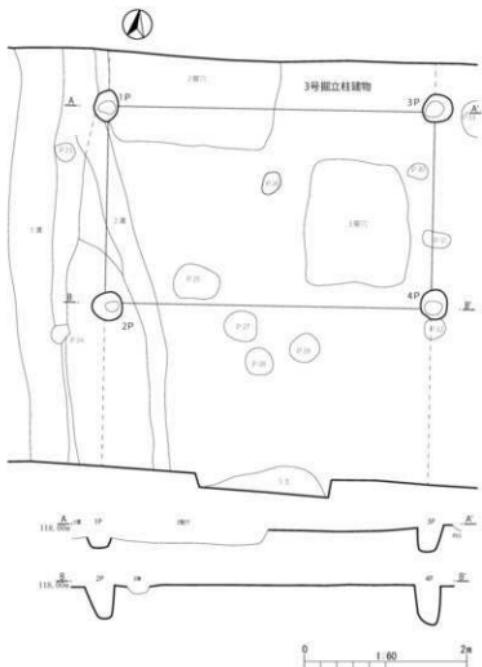
第13図 2号掘立柱建物

3号掘立柱建物

位置 調査区中央部 FG-5 周辺は溝や堅穴状遺構やピットなどの中世の遺構群となる。状況 4基のピットが規則的に配置されることから掘立柱建物とした。調査では 1 × 1 間としたが、南北に広がる可能性もある。形状・規模 東西は 403cm、南北は 240cm。方位 N-81°-E。ピット 覆土は暗褐色土で、As-B を含んでいる。各ピットの深さは 23 ~ 50cm であるが、確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものと考えられる。遺物 出土していない。時期 覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。

第10表
3号掘立柱建物ピット計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1P	39	29	23
2P	38	36	39
3P	37	35	30
4P	37	32	50



3号掘立柱建物 ピット覆土
1P. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり、As-B が混じる。黄色シルト粘を微量含む。
2P. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり、As-B が混じる。黄色シルト粘を少量含む。
3P. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり、As-B が混じる。黄色シルト粘を微量含む。
4P. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり、As-B が混じる。暗褐色土ブロック (~ 15mm) を中量、純土粘・炭化物粘を微量含む。

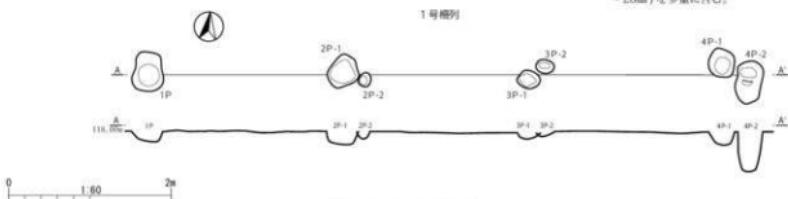
第14図 3号掘立柱建物

5. 櫛列

櫛列は1基検出された。

1号櫛列

位置 調査区西 C.D.E-6 **状況** ピットは7基であるが、4か所にまとまつた列状の配置であることから、4本の柱からなる櫛列が建て替えを伴った状況と想定した。**形状・規模** 全長は740cmであり、柱間は240cm程度となる。**方位** N-83°-E。**ピット** 7基を検出し、4か所のまとまりを1～4Pとし、まとまり内は枝番で分けている。覆土はほとんどのピットでAs-Bを含んでいる。深さは5～16cmと浅いものが多く、4P-2のみ47cmとなる。なお確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものとみられる。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。



第15図 1号櫛列

第11表
1号櫛列ピット・覆土計測表

遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	覆土
1P	48	39	12	A
2P-1	43	39	15	B
2P-2	18	15	8	A
3P-1	29	23	7	B
3P-2	23	17	5	B
4P-1	35	32	16	B
4P-2	53	33	47	B

ピット覆土の分類

- A. 暗褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。黄色シルト粒を微量含む。
- B. 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。暗褐色土ブロック(10～20mm)を多量に含む。

6. 溝

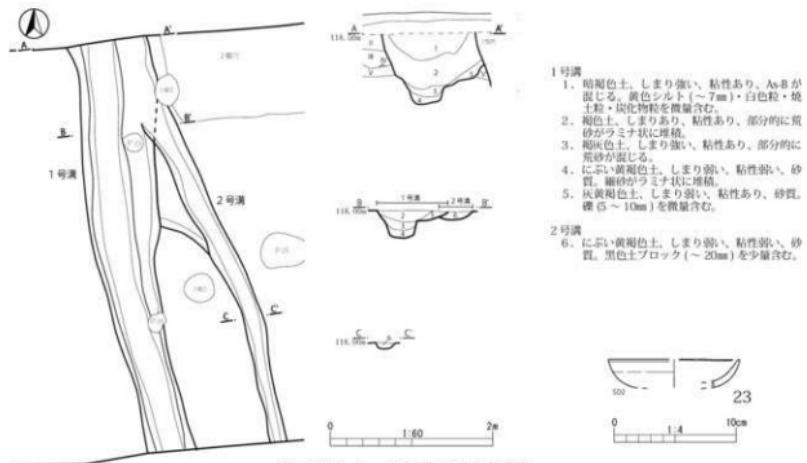
溝は5条検出された。

1号溝

位置 調査区西 F-5.6 2号溝、P23、P24と重複。東に2号竪穴状遺構が近接。**状況** 遺構の南北は調査区外で、2号溝を切って走行する。また壁面観察では東に近接する2号竪穴状遺構に切られる。P23、P24との新旧関係は不明。覆土の下層は荒砂がラミナ状の堆積となり、水流の痕跡が認められる。**形状・規模** 遺構は南北に走行する。現存長507cm、幅96cm、深さ34cm。なお深さは壁面観察で85cm程度となる。**方位** N-10°-W。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土上層にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

2号溝

位置 調査区西 F-5.6 1号溝と重複。東は2号竪穴状遺構などがある。**状況** 遺構の北は1号溝に切られ、南は調査区外で、緩くカーブしながら南へ走行する。**形状・規模** 現存長442cm、幅21cm、深さ6cm。**方位** N-20°-W。**遺物** 覆土より土師器壺の口縁部(23)が出土している。**時期** 覆土にAs-Bを含んでいないことや、出土遺物により、奈良・平安時代の遺構と考えられる。



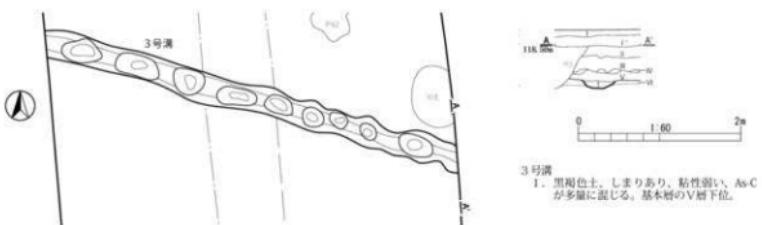
第16図 1・2号溝及び出土遺物

第12表 2号溝出土遺物観察表

規範 No	出土 位置	器種	残存率	口径・底径・器高	色調	胎土	焼成	調整	備考
23	覆土 土瓶器 环	口縁～胴部	1/8	(10.6) ← (2.3)	褐色	良好	焼化 外側ナデ 内面ナデ		磨滅している

3号溝

位置 調査区北 IJ-2.3 北に10号土坑が近接する。**状況** 遺構の東西は調査区外となる。遺構覆土にAs-Cを多く含む。また、遺構上位は古墳時代に相当するHr-FA(IV層)およびAs-C混土(V層)に覆われている。**形状・規模** 北西から南東に走行。現存長525cm、幅36cm、深さ13cm。**方位** N-76°-W。底面は径20～50cmの連続する窪みが確認された。**遺物** 繩文土器とみられる微細片と石器片が出土している。**時期** 覆土にAs-Cを多く含み、IV層とV層の下位にあることから、古墳時代前期～中期頃のものと考えられる。



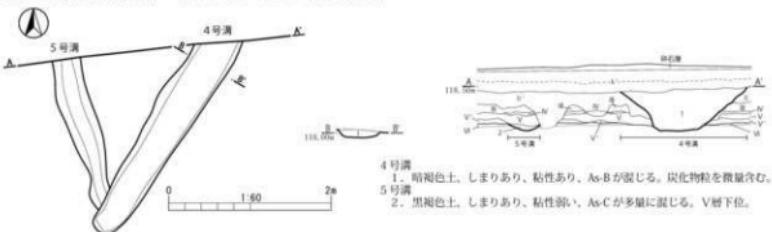
第17図 3号溝

4号溝

位置 調査区西 B-5.6 5号溝と重複する。**状況** 遺構の北は調査区外で、南端部で5号溝を切る。覆土にAs-Bが混じる。**形状・規模** 北東から南西に走行している。現存長273cm、幅50cm、深さ6cm。なお深さは壁面観察で50cm程度となる。**方位** N-35°-E。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

5号溝

位置 調査区西 B-5,6 4号溝と重複する。**状況** 溝の北は調査区外で、南端部は4号溝に切られる。覆土にAs-Cが多く混じる。IV層とV層で覆われている。**形状・規模** 南北に走行。現存長175cm、幅37cm、深さ7cm。**方位** N-15°-W。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Cを多く含みIV層およびV層の下位にあることから、古墳時代前期～中期ごろのものと考えられる。



第18図 4・5号溝

7. 土坑

調査では17基を土坑として検出したが、このうち3基（1・3・4号土坑）を竪穴状遺構に変更し、1基（13号土坑）を竪穴建物の一部と変更したため、本書では13基を土坑として扱う。

2号土坑

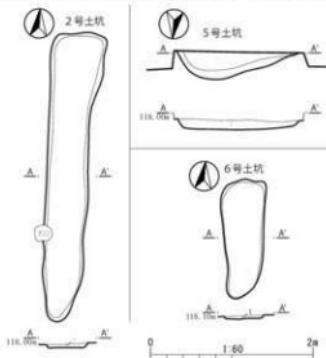
位置 調査区西 F-5,6 東に1号溝が隣接。**状況** P22が重複している。**形状・規模** 細長い不整方形。南端は丸みを帯びている。長軸355cm、短軸65cm、深さ5cm。なお確認面は古墳時代相当の面であり、本来はさらに深いものとみられる。断面は皿形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

5号土坑

位置 調査区中央部 G-6 西に2号溝が隣接。**状況** 南は調査区外となる。**形状・規模** 遺構は大部分が調査区外となるため全体の形状は不明。最長部143cm、深さ7cm。なお深さは2号土坑同様本来の深さではない。断面はレンズ状。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

6号土坑

位置 調査区中央部 H-5 西に1号井戸が隣接。**状況** 他の遺構との切り合いではなく、全体が確認できる。**形状・規模** 不整楕円形。長軸145cm、短軸52cm、深さ5cm。なお深さは2号土坑同様本来の深さではない。断面は皿形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。



第19図 2・5・6号土坑

7号土坑

位置 北の張り出し部の西壁 I-3 **状況** 西は調査区外となる。**形状・規模** 遺構は大部分が調査区外となるため全体の形状は不明。最長部206cm、深さ21cm。なお深さは壁面観察では40cm程度となる。断面は鍋底形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

8号土坑

位置 北の張り出し部の接続部西側 I-4 **状況** 北に9号土坑が隣接。**状況** 西は調査区外となる。**形状・規模** 遺構は調査区外となるため全体の形状は不明。最長部64cm、深さ6cm。なお深さは壁面観察では58cm程度となる。断面は鍋底形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

9号土坑

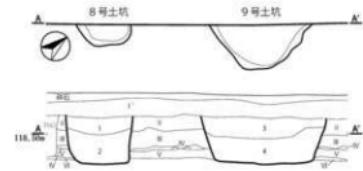
位置 北の張り出し部の接続部西側 I-4 **状況** 南に8号土坑が隣接。**状況** 西は調査区外となる。**形状・規模** 遺構は大部分が調査区外となるため全体の形状は不明。最長部121cm、深さ6cm。なお深さは壁面観察では57cm程度となる。断面は鍋底形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

10号土坑

位置 北の張り出し部の東壁 J-2 **状況** 東は調査区外となる。**形状・規模** 遺構は一部が調査区外となるが、平面形はほぼ円形と推測される。長軸75cm、深さ4cm。なお深さは壁面観察では53cm程度となる。断面は鍋底形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

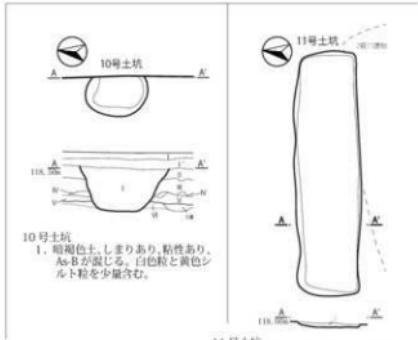
11号土坑

位置 調査区東 L-5 **2号竪穴建物と重複。****状況** 2号竪穴建物を切り、本遺構の方が新しい。**形状・規模** 長方形。長軸299cm、短軸78cm、深さ5cm、断面はレンズ状。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。



8+9号土坑

1. 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。白色粒と黄色シルト粒を少量含む。
2. 黑褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。黄色シルト(～10mm)を少量含む。
3. 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。炭化物粒と黄色シルト粒を微量含む。
4. 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。黒色地山(～5mm)を少量含む。炭化物粒と黄色シルト粒を微量含む。



- 11号土坑
1. 黒褐色土、しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。白色粒を微量含む。

第20図 7~11号土坑

12号土坑

位置 調査区東 LM-5 3号竪穴建物と近接。**状況** 他の遺構との切り合いはなく、全体が確認できる。**形状・規模** 長方形。長軸 183cm、短軸 55cm、深さ 11cm。なお深さは 2号土坑同様本来の深さではない。断面は箱形。**遺物** 覆土より須恵器环の小片が出土。**時期** 覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。

14号土坑

位置 調査区西 C.D-5 **状況** 他の遺構との切り合いはなく、全体が確認できる。**形状・規模** 長方形。長軸 159cm、短軸 54cm、深さ 13cm。なお深さは 2号土坑同様本来の深さではない。断面は鍋底形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。

15号土坑

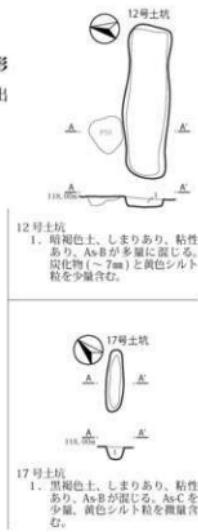
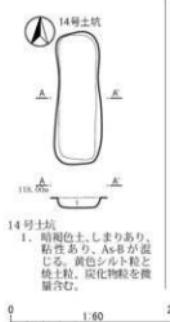
位置 調査区西 A-6 **状況** 1基の遺構として掘削を行なったが、切り合いを持つ遺構であることが確認できた。新しい遺構を 15号土坑-1 とし、古い遺構を 15号土坑-2 とした。**形状・規模** 1は長方形。長軸 129cm、短軸 90cm、深さ 31cm、断面は鍋底形。2は大半が 1に切られており形状は不明。最長部 87cm、深さ 10cm。なお深さは双方とも本来の深さではない。**遺物** 出土していない。**時期** 両遺構ともに覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。

16号土坑

位置 調査区西端 A-6.7 **状況** 西は調査区外となる。**形状・規模** 遺構は大部分が調査区外となるため全体の形状は不明。最長部 111cm、深さ 19cm。なお深さは壁面観察では 38cm 程度となる。断面はレンズ状。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。

17号土坑

位置 調査区西 D-5 **状況** 他の遺構との切り合いはなく、全体が確認できる。**形状・規模** 長方形。長軸 73cm、短軸 19cm、深さ 14cm、断面は鍋底形。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土に As-B を含んでおり、中世の所産と考えられる。



第 21 図 12・14～17号土坑

8. 井戸

2基検出された。

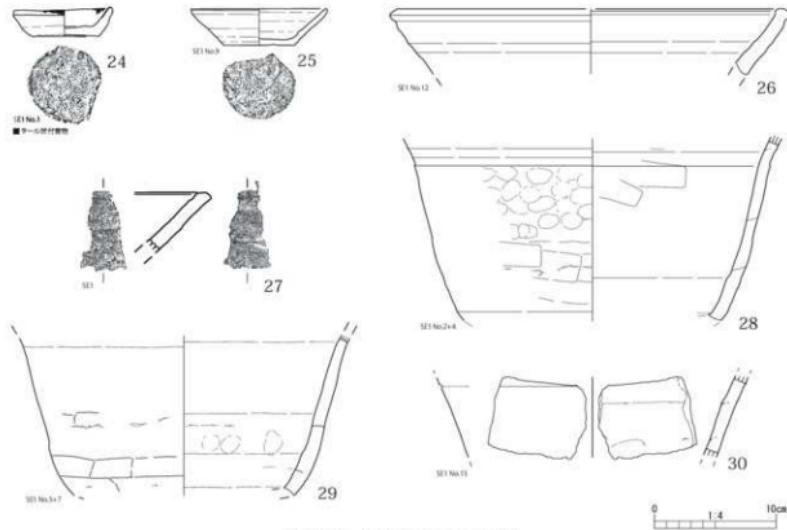
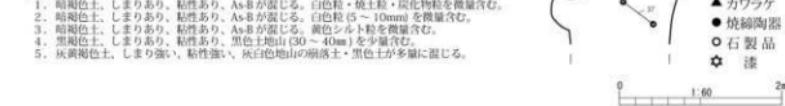
1号井戸

位置 調査区中央部 H-5 **状況** 遺構全体が確認でき、重複する遺構はない。覆土の上層はAs-Bを含んでいる。中層以下は壁面崩落によるブロック状の地山が堆積する。壁面は上端から約200cm付近で砂質の地山(XVII層)が崩落し、大きく抉られた状態であった。このため、掘削は250cmまでで調査を終了した。**形状・規模** やや不整な円形で直径は約230cm。断面形は漏斗状で、深部は北にずれる。底面は未確認で、深さは250cm以上となる。**遺物** 力ワラケ(24・25)、軟質陶器の擂鉢(26・27)、内耳鍋(28~32)、焼締陶器の甕類(33・34)などのほか、石製品としては撗き臼(35)、石臼(36)、茶臼(37)がある。そのほか、朱漆の塗膜片が確認された。

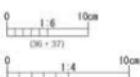
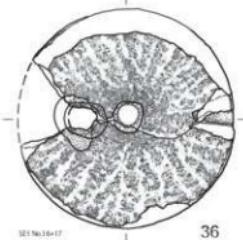
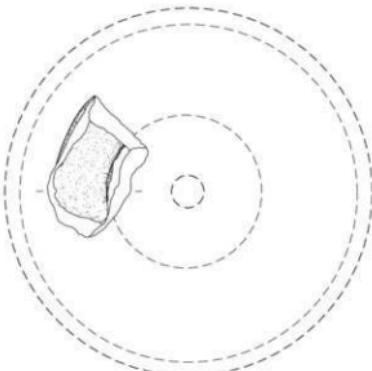
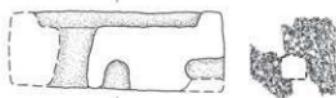
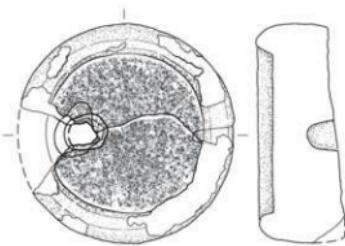
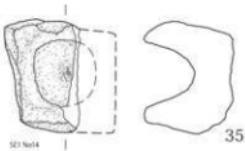
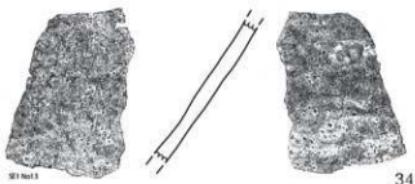
時期 出土遺物の力ワラケや軟質陶器から15世紀代と考えられる。

1号井戸

1. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり。As-Bが混じる。白色粒・焼土粒・炭化物粒を微量含む。
2. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり。As-Bが混じる。白色粒(5~10mm)を微量含む。
3. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり。As-Bが混じる。黄色シルト粒を微量含む。
4. 黒褐色土。しまりあり。粘性あり。黒色土地山(30~40mm)を少量含む。
5. 底黄褐色土。しまり強い。粘性強い。底白色地山の崩落土・黒色土が多量に混じる。



第22図 1号井戸及び出土遺物



第23図 1号井戸出土遺物

第13表 1号井戸出土遺物観察表

記載 No	出土 位置	種類	部位 残存率	上直径・底径・高さ	色調	胎土	焼成	調整		備考
								外表面	内表面	
24	覆土	カワラケ	ほぼ完形	(7.9) × 5.7 × 2.4	浅黄褐色	精選	焼成	外表面ナデ・底部糸切り	内表面ナデ	上層全体にタル状付着物 付帯に使用
25	覆土	カワラケ	L縫～底部 1/2	(11.2) × 5.9 × 3.0	褐色	白色長石 粒含む	焼成	外表面ナデ・底部糸切り	内表面ナデ	焼成不良の部分 あり
26	覆土	軟質陶器 埴跡	L縫部 1/10	(31.5) × ～ × (5.4)	淡赤橙色	良好	瓦質	外表面L横模ナデ・下方ヘラ状ナデ	内外面に黒色處理	
27	覆土	軟質陶器 埴跡	L縫部 破片	～～～(6.3)	灰黃褐色	長石含み ハゼあり	瓦質	外表面ナデ	内表面ナデ	内面磨滅
28	覆土	軟質陶器 内耳鉢	胸部 1/8	～～～(15.0)	表面・灰色 胎土・淡赤褐色	砂利少量 含む	瓦質	外表面ナデ・指オサエ 内表面ナデ	外面向下煤付着	
29	覆土	軟質陶器 内耳鉢	胸部 1/5	～～～(13.2)	表面・灰色 胎土・淡赤褐色	良好	瓦質	外表面黒色處理・ナデ 内表面ナデ	表面煤付着	
30	覆土	軟質陶器 内耳鉢	胸部 破片	～～～(6.6)	灰色	良好	瓦質	外表面ロクロナデ 内表面ロクロナデ	外面向下煤付着	
31	覆土	軟質陶器 内耳鉢	胸～底部 1/8	～～～(18.6) × (6.0)	表面・黒色 胎土・褐色	良好	瓦質	外表面ヘラナデ・底部無調整	表面煤付着	
32	覆土	軟質陶器 内耳鉢	胸～底部 破片	～～～(13.6) × (3.7)	灰白色	良好	瓦質	外表面ロクロナデ 内表面ロクロナデ	外面向下煤付着	
33	覆土	燒結陶器 甕	肩部 破片	～～～(4.8)	褐色	白色長石 粒含む	焼締	外表面ヘラナデ 内表面ナデ	外表面による 自然釉 内表面褐色 処理	
34	覆土	燒結陶器 甕	胸部 破片	～～～(12.3)	褐色	白色長石 粒含む	焼締	外表面ヘラナデ 内表面ナデ	内表面による 自然釉 表面褐色 処理	

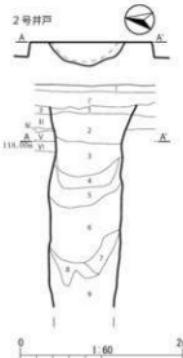
記載 No	出土 位置	種別	部位 残存率	長さ・幅・厚さ・重量(g)	石材	形態・特徴		備考	
						外表面	内表面		
35	覆土	石製品 掻き臼 か?	1/2か?	(9.2) × (6.1) × (8.5) × 431.14	粗粒安山岩	四角柱状の本体に楕円形の溝みを穿つ。溝みの形は確定 で楕円形。溝みの内面の摩滅は少ない。表面は全体的に凸 凹している。			
36	覆土	石製品 臼石	上臼 9/10	26.8 × ～ × 10.5 × 7832.2	粗粒安山岩	掻き臼の上臼。擦り合わせ部が使用により不均一に擦り 減っている。溝は6分画4溝。反時計回りに使用。打ち込 み穴は方形に開けられており、掻き木は横打ち込み式。			
37	覆土	石製品 茶臼	下臼台部 1/6	(32.2) × ～ × (8.9) × 1881.2	粗粒安山岩	下臼の受皿～台部。台部側面と受皿の表面は研磨により丁 寧に仕上げられている。底面には、平らにしたことによる 加工痕が残る。			

2号井戸

位置 北の張り出し部の東壁 J-3 **状況** 重複する遺構はない。遺構の大半は調査区外であり、約80cmを人力で掘削した。その後、上端の測量と航空写真撮影後に、重機により確認面から200cmまでを断削った。覆土の上層はAs-Bを含んでおり、中層以下は壁面崩落によるブロック状の地山が多く混じる。**形状・規模** 遺構の一部であるがおおよそ円形で、径は100cm以上と予想される。断面形は円筒状。底面は未確認で、深さは200cm以上となる。**遺物** 出土していない。**時期** 覆土にAs-Bを含んでおり、中世の所産と考えられる。

2号井戸

1. 黄褐色土。しまりあり、粘性あり、As-Bが混じる。やや砂質。
2. 黒褐色土。しまりあり、粘性あり、As-Bが多量に混じる。黒褐色粘土粒を微量含む。
3. 黑褐色土。しまりあり、粘性あり、As-Bが少量に混じる。黒褐色粘土粒(10～20mm)を少量含む。
4. にふい黄褐色土。しまりあり、粘性あり。にふい黄褐色粘土(10～40mm)主体。黒色土が少量混じる。
5. 黑褐色土。しまり弱い、粘性あり。
6. 黑褐色土。しまり弱い、粘性あり。にふい黄褐色粘土(～10mm)。
7. にふい黄褐色土。しまり弱い、粘性弱い。にふい黄褐色粘土(10～30mm)主体。黒色土が少量混じる。
8. 黑褐色土。しまり弱い、粘性あり。にふい黄褐色粘土(10～30mm)を少量含む。
9. 黑褐色土。しまり弱い、粘性あり。にふい黄褐色粘土(10～30mm)を少量含む。



第24図 2号井戸

9. ピット

ピットは掘立柱建物および柵列遺構とならなかった単独のピットで、62基を検出した。このうちの41基(66%)は覆土にAs-Bが混入していることから、中世に該当するものと考えられる。しかし、覆土にAs-Bが顕著に認められない44号ピットでは15世紀代の軟質陶器の擂鉢(39)が出土した。このことからAs-Bが目立たないピットでも中世に該当する可能性が考えられる。確認面が古墳時代相当で、覆土にAs-Bを含むピットは、Ⅲ層上面から掘り込まれたものとみられ、現状より深いものであったと考えられる。37・60号ピットは平面では表土掘削により消滅したが、壁断面で確認できた遺構である。

ピットの平面は第4図(基本層序と全体図)に示した。また覆土はA~Fまでの6つに分類し、第14表(ピット観察表)に掲載した。

第14表 ピット観察表

遺構番号	グリット	覆土	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考欄	遺構番号	グリット	覆土	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考欄
1号ピット	A6	A	33	-	20		37号ピット	H5	D	<45°	-	<30°	壁断面で確認
2号ピット	A6	A	42	34	24		38号ピット	H5	不明	46	-	44	No.38出土か
3号ピット	A6	A	22	15	8		39号ピット	H5	不明	48	-	61	No.38出土か
4号ピット	A6	A	42	24	17		40号ピット	I5	不明	-	-	39	No.38出土か
5号ピット	A6	A	24	21	14		41号ピット	I5	不明	-	-	64	No.38出土か
6号ピット	A6	A	23	22	16		42号ピット	I5	A	26	20	17	
7号ピット	B5	A	24	20	25		43号ピット	H5	E	42	33	51	
8号ピット	B6	A	30	27	29		44号ピット	I5	E	45	38	34	No.39出土
9号ピット	B6	A	16	15	8		45号ピット	I5	E	27	23	30	
10号ピット	B6	A	27	21	31		46号ピット	I5	E	29	23	55	
11号ピット	B6	D	25	18	8		47号ピット	I5	E	28	17	69	
12号ピット	C5	D	24	24	6		48号ピット	I5	E	47	-	139	
13号ピット	C5	D	33	27	7		49号ピット	I5	E	32	-	108	
14号ピット	C6	D	38	27	8		50号ピット	H5	C	45	-	33	
15号ピット	C5	D	43	33	7		51号ピット	H5	C	37	-	67	
16号ピット	C5	A	23	19	6		52号ピット	H5	B	36	20	22	
17号ピット	D5	A	25	24	7		53号ピット	H5	B	54	51	42	
18号ピット	D5	A	30	26	11		54号ピット	I5	B	47	38	70	
19号ピット	E5	A	21	20	7		55号ピット	I5	F	39	32	54	
20号ピット	E5	A	27	23	6		56号ピット	I5	A	35	30	11	
21号ピット	E5	A	34	28	19		57号ピット	I5	A	44	28	22	
22号ピット	F5	A	21	20	12		58号ピット	I5	A	46	-	12	
23号ピット	F5	A	25	22	11		59号ピット	M4	B	47	43	11	
24号ピット	F6	A	25	22	28		60号ピット	I4	C	<25°	-	<50°	壁断面で確認
25号ピット	F5	A	56	43	5		61号ピット	J2	D	47	37	12	
26号ピット	G5	A	28	22	15		62号ピット	J2	D	55	48	65	
27号ピット	G5	A	41	36	14								※ <>は壁断面確認
28号ピット	G6	A	35	33	17								
29号ピット	G5	A	36	33	25								
30号ピット	G5	A	30	19	14								
31号ピット	G5	D	34	19	12								
32号ピット	G5	A	26	24	34								
33号ピット	G5	A	44	41	6								
34号ピット	G5	A	38	35	9								
35号ピット	G5	B	32	28	38								
36号ピット	H5	A	56	-	58								

36・38~41号ピット



44号ピット



0 1.4 10cm

第25図 ピット出土遺物

第15表 ピット出土遺物観察表

測定番号	出土位置	器種	部位 残存率	口径・底径・器高	色調	埴土	焼成	調整	備考
38	P36 • 38 ~ 41	焼締陶器 瓶	胴部 破片	— — (4.6)	褐灰色	白色長石 粒含む	焼締	外側ヘラミガキ 内側ヘラミガキ	内面削減による 自然な白い表面
39	P44	軟質陶器 擂鉢	口縁部 破片	— — (7.0)	にぶい褐色	良好	直質	外側横ナデ 内側横ナデ	内面磨減していない

第IV章 考察・検討

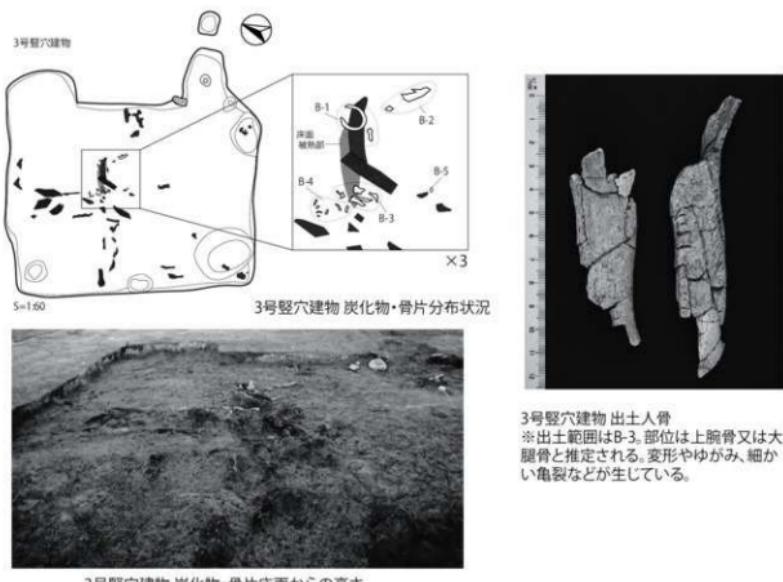
1. 3号竪穴建物出土の人骨について

本遺跡の3号竪穴建物覆土中より、多量の炭化物とともに骨片が検出された。これらの炭化物と骨片は分布図を作成し取り上げを行なった。

取り上げた骨は乾燥させ、付着した土を落とし、宮崎 重雄氏に観察を依頼し、以下の所見を頂いた。

1. 出土した骨片は、変形・ゆがみ、細片化が著しく、炭化物とともに出土し、炭化物の付着も見られることから、焼骨であることは明らかである。
2. 骨に変形・ゆがみが生じていることは、死後まもなく焼かれたことを示している。
3. 加えられた火の温度は、600～800°C程度が推定される。
4. 出土部位には頭骨や歯は認められず、ほとんどは上腕骨又は大腿骨などの四肢骨である。
5. 骨の大きさから、成人骨と判断されるが、性別は不明である。

以上の所見から出土した骨片は、死後まもなく焼かれたものであり、四肢骨を中心とする部分的な部位であつた。出土状況としては、遺構内の中心付近に集中し、床面の近くに分布し、遺構覆土には炭化木材と焼土が混じり、床面には被熱痕跡があった。このことから遺体はこの場所で焼かれた可能性が高く、3号竪穴建物の廃絶後に行なわれたものと考えられる。この点から、これらの骨片は火葬が行なわれた後の残りであると推定される。



第26図 3号竪穴建物 炭化物・骨片分布状況

2. 総括

今回の調査では竪穴建物、竪穴状遺構、掘立柱建物、柵列、溝、土坑、井戸、ピットを検出し、これらは古墳時代から中世にかけての遺構と考えられる。

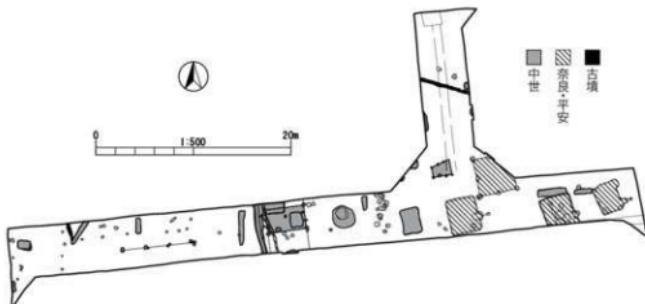
古墳時代の遺構としては3号溝と5号溝が該当する。これらはHr-FA層(IV層)とAs-C混土(V層)の下位にあり、古墳時代後期以前の遺構と考えられる。ただし、遺構としては数が少なく、この段階の様相は不明確である。

奈良・平安時代の遺構としては1～3号竪穴建物、1号掘立柱建物、2号溝などが該当する。竪穴建物と掘立柱建物は切り合いがなく整然と配置しているが時期は異なっており、集落としては散漫かつ小規模なものであったと考えられる。これらの遺構は調査区の東部に集中し、天王川に近い台地縁辺は奈良～平安時代にかけての集落があったものと考えられる。

中世以降の遺構としては竪穴状遺構、掘立柱建物、柵列、溝、土坑、井戸、ピットなどがある。これらの覆土にはAs-Bが混入している。分布は調査区中央から西に配置する傾向である。時期は1号井戸で出土した内耳鉗などから15世紀代とみられ、そのほかも近い時期と推定される。これらの遺構群は屋敷跡や集落の一部であった可能性がある。

本遺跡のある中泉町は三国街道(県道高崎渋川線)が南北に縱断しているが、戦前まではその多くが耕作地であった。1970年代からは宅地や店舗などの開発が進んでいるものの、発掘調査事例は少なく、遺跡の様相は断片的にしか得られないのが現状である。周辺遺跡での奈良・平安時代の集落としては西500mにある中泉稻荷前遺跡(9世紀)や南西1.2kmにある唐沢川左岸の福島富士腰南遺跡(9世紀後半～11世紀中頃)があるほか、北1～1.2kmにある棟高村北遺跡(天王川左岸)や棟高南八幡街道遺跡(天王川右岸)では、古墳～平安時代にかけての集落が確認されている。一方、中世の遺跡としては北西500mにある中泉十王堂遺跡があり、As-Bを含む竪穴状遺構や土坑、井戸などが確認されている。また先に示した棟高南八幡街道遺跡でも掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、井戸、ピット群などが確認されている。

本遺跡は調査範囲が狭く、断片的ではあるが、奈良・平安時代の集落と中世の遺構群であることが確認されている。本遺跡と同様の時期傾向を示しているのは、天王川右岸の台地にある棟高南八幡街道遺跡である。このことは天王川右岸一帯が土地利用においては共通性を持ったものであったと考えられる。



第27図 遺構傾向

引用・参考文献

- 『中泉遺跡』(1983) 群馬町教育委員会.
- 『新編 高崎市史 資料編3 中世I』(1996) 高崎市市史編さん委員会.
- 『群馬町誌 資料編1 原始古代 中世』(1998) 群馬町史編纂委員会.
- 『新編 高崎市史 資料編1』(1999) 高崎市市史編さん委員会.
- 『新編 高崎市史 資料編2 原始古代II』(2000) 高崎市市史編さん委員会.
- 坂口 一「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究』24号(2000) 群馬県史編さん委員会.
- 『北原村東遺跡・中泉稻荷前遺跡』(2004) 群馬町教育委員会.
- 『福島富士腰南遺跡』(2007) 高崎市教育委員会.
- 『棟高南八幡街道遺跡』(2014) 有限会社高澤考古学研究所.
- 『中泉十王堂遺跡』(2016) 有限会社毛野考古学研究所.
- 『中泉十王堂遺跡3』(2018) 技研コンサル株式会社.
- 『棟高村北遺跡』(2018) 有限会社歴史考房まほら.
- 『棟高南八幡街道遺跡2』(2018) 山下工業株式会社.
- 『群馬県古墳総覧』(2018) 群馬県教育委員会.
- 『棟高南八幡街道遺跡3』(2019) 山下工業株式会社.

写真図版



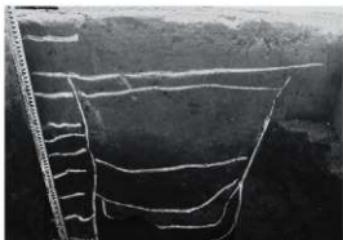
1. 調査区全景 南東から



2. 調査区全景



1. 天王川の上流から見る調査区遠景
※調査区は右岸の崖上にある。



2. 2号井戸脇基本土層 西から



3. 1～3号竪穴建物配置状況



4. 1号竪穴建物完掘 西から



5. 1号竪穴建物カマド 西から



6. 1号竪穴建物カマド煙道残存状況



7. 1号竪穴建物遺物出土状況 北西から



1. 2号竖穴建物ピット群完掘 西から



2. 2号竖穴建物カマド完掘 西から



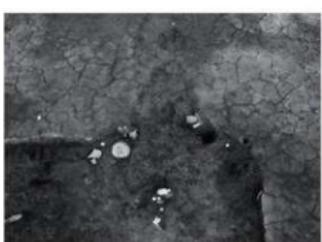
3. 2号竖穴建物カマド掘方
袖石出土状況 西から



4. 3号竖穴建物完掘 西から



5. 3号竖穴建物遺物・炭確認状況
西から



6. 3号竖穴建物遺物・炭確認状況
カマド周辺



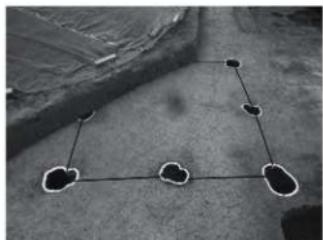
7. 1号竖穴状遺構完掘 南から



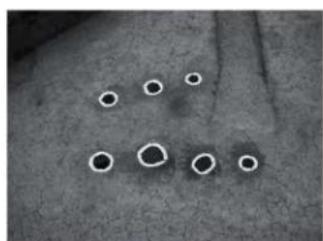
8. 2号竖穴状遺構完掘 南から



1. 3号竪穴状遺構完掘 南から



2. 1号掘立柱建物完掘 西から



3. 2号掘立柱建物完掘 南から



4. 3号掘立柱建物完掘 南から



5. 1号・2号溝完掘 南から



6. 3号溝完掘 西から



7. 4号・5号溝完掘 南から



8. 1号柵列 南東から



1. 1号井戸完掘 南から



2. 1号井戸セクションA 南から



3. 1号井戸碟出土状況 南から



4. 2号井戸上端 西から



5. 2号井戸セクション 西から



6. 2号土坑完掘 南から



7. 5号土坑完掘 北から



8. 6号土坑完掘 南から



1. 8号土坑完掘 南東から



2. 9号土坑完掘 南東から



3. 11号土坑完掘 西から



4. 12号土坑・P59完掘 西から



5. 14号土坑完掘 南から



6. 15号土坑完掘 東から



7. 調査区西側 南東より



8. 調査区中央 南西より

图版7

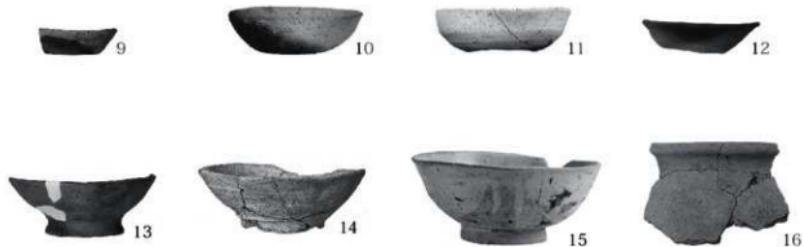
1号竖穴建物



2号竖穴建物



3号竖穴建物



1号掘立柱建物



2号沟



出土遗物(1)



1号井戸



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34

1号井戸



35



36



38



36・38～41号ピット

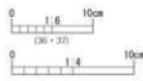


38

44号ピット



39



出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	なかいすみみなもとじゅうないいせき							
書名	中泉源十内遺跡							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 451 集							
編著者名	青木 利文 石塚 久則 城 ゆかり							
編集機関	山下工業株式会社							
平 371-0244 群馬県前橋市鶴毛石町 207-8								
発行機関	高崎市教育委員会 文化財保護課							
発行年月日	2020 年 6 月 15 日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中泉源十内遺跡	群馬県高崎市 中泉町字源十内 271、272、273、 274-1・3・4、278、 279	102020	756	36° 22'25"	139° 00'15"	2019. 2.22 ～ 2019. 4. 3	455m ²	宅地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中泉源十内遺跡	不明	古墳時代	溝	2 条	なし	As-C 混土を覆土とする溝。		
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴建物 掘立柱建物 溝	3 軒 1 棟 1 条	土師器 須恵器 灰陶陶器 鍛鍊車 木製品 貝巣穴泥岩？	1 号竪穴建物はトンネル状の煙道が残り、遺物は鍛鍊車と貝巣穴泥岩？が出土。3 号竪穴建物は 10 世紀後半から 11 世紀代の遺物が出土し、覆土からは炭化木材と焼骨片が出土しており、焼失建物か火葬の痕跡の可能性がある。1 号掘立柱建物は 2 × 2 間の正方形。		
	集落跡	中世以前	竪穴状遺構 掘立柱建物 横列 溝 土坑 井戸 ピット	3 基 2 棟 1 基 2 条 13 基 2 基 62 基	カワラケ 軟質陶器 燒締陶器 石製品	中世以降の遺構は As-B 混土を含むのが多い。1 号井戸からはカワラケ、内耳鍋、擂鉢、燒締陶器のほか、石臼、茶臼片が出土している。ピットには As-B を含まないものもあり、中世以前の遺構となる可能性がある。		

中泉源十内遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020 年 6 月 10 日 印刷

2020 年 6 月 15 日 発行

発行 高崎市教育委員会

編集 山下工業株式会社

印刷 朝日印刷工業株式会社